

小児科だより vol.61

～ パラインフルエンザウイルス感染症 ～

2020.10.1 発行

こんにちは。だんだん日が短くなり、朝晩は涼しく感じるようになってまいりました。小児科外来では、夏の終わり頃からパラインフルエンザウイルス感染症のお子さんを見かけるようになってきました。保護者の方に説明すると、あまり聞きなれない名前のため、過度に心配される方もいらっしゃいます。名前がインフルエンザや Hib（インフルエンザ菌 b 型）と混同しやすいため、不安を感じる方もいるのかもしれませんが、ということで、今回は、『パラインフルエンザウイルス感染症』について、お話ししたいと思います。



パラインフルエンザウイルスは、いわゆる風邪の原因となるウイルスです。子どもに感染すると、クループ症候群や喘息様の症状を引き起こすことでも知られています。クループ症候群のうち、ウイルス性クループは、上気道感染をきっかけにして、声門下にむくみが生じて、特徴的な咳（犬が吠えるような、オットセイが鳴くような）声枯れ、吸気性の喘鳴（息を吸うのが苦しそうに見える）を認めることが多く、生理的に声門下が狭い 3 歳以下の乳幼児に好発します。

パラインフルエンザウイルス感染症は、これまでも春と秋に流行してきた、いわゆる風邪ウイルスの一種です。国立感染症研究所のデータでは、2020 年は（おそらく新型コロナウイルスの影響で）全く流行しませんでした。今年全国的に大きな流行になっています。

なぜこのタイミングで有名になったかという点、実は、新型コロナウイルスのパンデミックにより、これまでは一部の集中治療領域などに限定されて行われてきた、院内での PCR 検査が広く行われるようになったことが影響しています。当院でも、呼吸器感染症を起こす病原体を 20 種類程度同時に検出する、『Fim array システム』が導入されました。これにより、これまではいわゆる風邪と診断されていたものの一部に、特定の診断（パラインフルエンザウイルス感染症など）がつくようになりました。この検査は、特殊な検査ですので、必要な人に必要なタイミングで行っております。

パラインフルエンザウイルス感染症に、特別な治療はありません。基本的には他の風邪と同じように、安静と必要に応じて症状に対応することです。咳症状などが続く方は小児科外来にご相談下さい。